

ヘブル人への手紙9章「より優れた聖所」

1A さらに完全な幕屋 1-15

1B 地上の幕屋 1-10

2B 永遠の贖い 11-15

2A 聖所のきよめ 16-28

1B 血による契約 16-22

2B 御自身のいけにえ 23-28

本文

ヘブル書 9 章に入ります。ヘブル人への手紙の山頂に向かってどんどん登っています。著者が語りたことは、天の大能者の右に着座された方、イエスが私たちの大祭司だということです。日曜日に学びましたが、私たちがそのまま、キリストにあって大胆に神に近づくことのできる、とてつもない恵みについて説き明かしています。メルキゼデクについて詳細に語った後、著者は、8 章において、大祭司の務めである聖所に入るることについて話し始めました。そこで、さらに優れた契約が約束されていて、それが「新しい契約」であると預言者エレミヤが預言しました。8 章は、さらに優れた契約、新しい契約が主題でした。そして、9 章は「さらに優れた聖所」であります。地上にある聖所を述べてから、そこに反映されている天の聖所を語り始めます。

1A さらに完全な幕屋 1-15

1B 地上の幕屋 1-10

1 初めの契約にも礼拝の規定と地上の聖所とがありました。

「初めの契約」は、モーセが仲介者となった古い契約のことです。イスラエルがエジプトを出て、シナイ山のふもとにまで導かれました。そして、主の命令に聞き従えば宝の民になるという約束が与えられ、十戒、そして、さばきつかさのための定めを啓示し、それからその契約をモーセは、イスラエルの民と結びました。いけにえの血を彼らに注ぎ、石の板に書かれた契約の書にも注いで、契約を結んだのです。それから再びモーセはシナイ山に登って、そこで与えられたのが、地上の聖所の型についての啓示でした。また大祭司の装束と、その任職式についての規定も与えられています。

2 幕屋が設けられ、その前部の所には、燭台と机と供えのパンがありました。聖所と呼ばれる所です。

3 また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、4 そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナのはいった金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。5 また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べることはできません。

出エジプト記 25 章以降に書いてある、聖所の中身です。全体を聖所と呼び、板を組み合わせて造り、その上を幕で覆います。東の方角から入るところは幕になっています。しかし、その中にさらに垂れ幕で仕切り、手前を聖所、その奥を至聖所と呼びます。中に入ると左手に燭台があります。ヘブル語ではミノラーと呼ばれているものです。祭司は絶えず、その火がともされているように油の調整を行ないます。そして、右手にはパンを供える机があります。十二のパンは、イスラエル十二部族を表しています。週ごとに新しいパンに取りかえます。祭司はそれを食べて礼拝をささげます。そして、正面には金の香壇があります。香がたかれて、それは主への祈りとなります。この場所が聖所と呼ばれるところです。

そして垂れ幕があります。垂れ幕をくぐると、そこは至聖所です。そこには、契約の箱があります。契約の箱の中には、マナのはいたつぼ、アロンの杖、そして十戒が刻まれている契約の板が二枚ありました。マナの入った壺は、荒野でマナが与えられたことの記念として、アロンの杖はコラが反乱を起こした後に、アロンを神が選ばれたことを示すものでした。そして契約の箱の上に、純金で出来た贖いの蓋があります。二人のケルビムがちょうど翼を交差させる形で向き合っています。そこは燭台のような照明器具がないにも関わらず光り輝いています。なぜなら、主がそこにおられるからです。

ところで、香壇が至聖所の中にあるように書かれていますが、ここの正確な訳は「香に属するもの」となっているそうです。香壇は位置としては第二の垂れ幕の手前にありますが、大祭司が至聖所に入る時に、その香壇の煙が中に入るようにして、彼自身が主なる神の聖さによって殺されることのないようにするという目的がありました。ですから、本質的には至聖所に属しているものです。

このように他のどのような民族にも、主がご自分の栄光を現わしておられるような民族がありませんでした。主をこのように近しく礼拝できるような民はいませんでした。ユダヤ人は、このことを誇りに思って、礼拝を捧げていたのです。しかし、今や、それよりも優れた礼拝が与えられています。

2C 大祭司 6-10

6 さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつもは行って礼拝を行なうのですが、7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけは入ります。そのとき、血を携えずにはいるようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

聖所と呼ばれているところは、祭司たちが燭台の灯や供えのパンのため入って、礼拝を行ないません。けれども、至聖所には大祭司が年に一度だけ入ります。この日は、贖罪日、あるいはヨム・キプールと呼ばれる日です。レビ記 16 章に、この日に行なう大祭司の務めが書かれています。

贖罪日は、大祭司が至聖所に入って、イスラエルの罪の贖いの総清算をする日です。大祭司はいつもの装束ではなく、白い亜麻布の装束に着替えます。そして、一頭の雄羊と、二頭の雄やぎを用意

します。大祭司が至聖所に入るとき、彼は罪を持っていますから、主に近づくものなら必ず打たれてしまいます。まず自分の罪のためにいけにえをささげて、きよめられなければいけません。そして、その流された血を携え、また炭火で香をたいたものを持って、至聖所に入ります。香から出て来る雲が贖いの蓋を覆うようにします。そして、携えた血を贖いの蓋の前で振りかけます。

それから大祭司は外に出てきて、今度は先ほどの二頭のやぎのうち、くじびきによって一頭はイスラエルのための罪のいけにえとし、もう一頭はアザゼル、あるいはスケープゴートとして生かします。大祭司は罪のためのいけにえをほふって、その血を携えて至聖所に入ります。ところで、贖罪日における幕屋の中での奉仕は、すべて大祭司一人で行なっています。他の祭司はこの礼拝に加わることはできません。そして、イスラエルの罪の告白をします。それから血を再び贖いの蓋の前で振りかけて、至聖所から出てきます。そして、残りのやぎ、アザゼルに手を置いて、罪の告白をした後、荒野に解き放ちます。このやぎが荒野に遠くさまよってから、見えなくなったのを確認して、大祭司は、イスラエルの罪が、東が西から離れているように、罪が引き離されたことを宣言します。こうした贖罪の働きを、大祭司が年に一度行なうのです。

8 これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。

ここの「前の幕屋」の意味ですが、二つの解釈があります。一つは、モーセによって設けられた地上の幕屋全体のことです。これが存続しているかぎり、まことの聖所への道、すなわち神のおられる所への道が明らかにされていない、ということです。この意味によれば、イスラエルの人々がキリストが現れた後も、モーセの幕屋あるいはその延長の地上の神殿に頼れば、キリストが入られた天にあるまことの聖所が明らかにされなくなる、地上の幕屋がまことの神の栄光を遮るものとなる、と解釈できます。

けれども、新共同訳や口語訳は、それぞれ「第一の幕屋」「前方の幕屋」と訳しています。つまり幕屋の中の前方にある部分、聖所のことです。そして、「まことの聖所」と新改訳が訳しているところは、3節の「至聖所」と同じギリシヤ語です。したがって、新共同訳や口語訳の訳に従うと、前方の幕屋、聖所が存続しているので、至聖所への道が明らかにされていない、ということになります。神の民、イスラエルに対して、主が栄光で輝く、契約の箱の上、贖いの蓋のケルビムの間にあるその栄光は現れていない、ということです。この仕切りの垂れ幕を、キリストはご自分の肉体によって切り裂かれました。主が十字架に付けられている時に、地震が起こり、エルサレムの神殿の垂れ幕が上から下へと切り裂かれたのです。

どちらの解釈も可能です。地上の幕屋に望みをおけば、まことの聖所である天の望みを抱かせなくなります。また、地上の幕屋においては、仕切りがあり、聖なる神への道は遮られています。このことは、今の私たちに人間に当てはまります。キリストがすでに来られました。そして、神への道は大きく

開かれています。イエス様は、「わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」と言われました(黙示 21:6)。けれども、自分の心の内で仕切りを作っていれば、あるいは、社会的、文化的、その他の隔ての壁を神と自分との間に設けるなら、それはイスラエルの民が地上の幕屋で神に仕えているのと同じになってしまいます。そして地上のこと、それがたとえ目に見える教会であっても、その目に見えることだけに心が向いていけば、天の聖所が見えないという妨げにさえなります。

9 この幕屋はその当時のための比喩です。それに従って、ささげ物といけにえとがささげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません。

8 章にて、地上の幕屋は、「天にあるものの写しと影」であるとありました。そして 9 章 24 節には、「本物の模型」とあります。本物である天を指し示しているのですが、実体ではないということです。興味深いことに、今のイスラエルに行くと、ネゲブの砂漠に、エイラットの近くに、幕屋の模型があります。そこに常駐しているガイドは、イエス様を信じるユダヤ人です。そして、クリスチャンに対しては、この幕屋がキリストを指し示す例えとして説明していただきます。

もちろん、異邦人は、このような神の啓示も与えられておらず、暗闇の中において、神から離れており、イスラエルの民は祝福されていました。けれども、それは後に来るはずの完成を待つための、メシヤを待ち望み、慕い求めるための分岐点だったのです。地上の幕屋で祭司たちが仕えている中で、そこに映し出されている天の希望を待ち焦がれるようにさせていたのです。

したがって、この幕屋自体に、そのいけにえと捧げ物自体に、私たちの罪を完全に贖う力を持っていません。ここの著者の言葉が大事ですね、「礼拝する者の良心を完全にすることはできない」というところです。罪によって良心が汚されています。良心が汚されているというのは、自分の罪が完全に赦されているわけではない、ということです。だから、その罪意識によって自分をさらに、いけにえを捧げるように駆り立てます。

宗教改革の創始者であるルターのことを覚えます。彼は司祭になりましたが、弱く小さな人間である自分がミサを通じて巨大な神の前に直接立っていることに恐れすら覚えたそうです。当時から彼はどれだけ熱心に修道生活を送り、祈りを捧げても心の平安が得られないと感じていました。いくら禁欲的な生活をして罪を犯さないよう努力し、できうる限りの善業を行ったとしても、神の前で自分は義である、すなわち正しいと確実に言うことはできない、ということでした。ところが、ローマ 1 章 17 節にある、「義人は、その信仰によって生きる」という言葉から光が与えられ、自分を義とするのは、ただ信仰によってのみであり、もっぱら神の恵みによるのだということを悟ったのです。(参照: ウィキペディア)

10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに関するもので、新しい秩序の立てられる時まで課せられた、からだに関する規定にすぎないからです。

私たちは、8 章において新しい契約の約束を読みました。それは、主がご自分の律法を思いの中に入れて、心の中に書きつける、というものです(10 節)。したがって、思いと心を神が変えてくださいます。内側を新たにしてくださるのですが、地上の幕屋における規定は、その内側にまで及ばないものになっています。それを著者は、「からだに関する規定」と呼んでいます。そして、それは「新しい秩序」が立てられる時まで課せられた、とあります。新しい秩序、それはメルキゼデクの例にならって、とこしえの大祭司となられたイエス様の秩序です。

2B 永遠の贖い 11-15

ここまでが、地上の幕屋における限界を述べています。次、8 節から、その欠けたものを完全にする、キリストの行われた大祭司の務めを述べています。

11 しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

キリストが来られました！「すでに成就したすばらしい事から」とありますが、そうですね、良き知らせであるキリストがこの世に来られました。そして十字架上で贖いを成し遂げられ、よみがえり、天に昇られました。そしてこの方が大祭司となりました。

ここで、地上の幕屋とまことの聖所との違いを述べています。一つに、前者は手で造られたけれども、後者は造られたものではない、ということです。天は神が住まわれるところであり、人によって造られたものではありません。私たちの信仰生活が、「自分が支えなければ成り立たない」という頑張りになっていたら、新約の奉仕者ではなく旧約の奉仕者になっています。

そして二つ目に、「さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り」ということです。ヘブル書の鍵になる言葉は「さらに」です。旧約における幕屋も、偉大であり、優れています。しかしキリストの入られた幕屋は、さらに偉大で、さらに完全であります。

「完全」に「さらに」という言葉を使えるのか？という疑問が湧くかもしれませんが、「十全」とか「完熟」という言葉を使えば分かるかもしれません。旧約の秩序は、真理へ導くための家庭教師であり、霊的に幼児のものであり、そこから新約の秩序の中に入り、完全な大人になるという考えが背後にあります。パウロがこう説明しました。「しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。(ガラテヤ 4:8-10)」私たちが、地上で行うこと、教会の中で行うことも、天の現実に応答する中で動かないといけません。教会の中で目に見える

ものに拠り頼み、その目に見えるもので判断して、それで神に近づこうとする時に私たちは、この過ちを犯します。キリスト者の成熟は、キリストがまことの聖所でご自身の血を携えていかれた、という現実に根ざしているかどうかで、決まってきます。

そして三つ目に、「やぎと子羊の血」と「キリストご自身の血」の違いであります。血が流されたということは優れていますが、それには限界があることを次の章、10章で学びます。四つ目は、天の聖所が「ただ一度」ということです。地上は年に一度、大祭司が入っていき、繰り返されますが、キリストはただ一度で行われました。そして最後、五つ目は「永遠の贖い」です。地上の幕屋は、年ごとに行わなければならない、一年しか持ちません。しかし、キリストの贖いは一年後も、二年後も、実に永遠に私たちを贖ってくださいました。

13 もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするすれば、

この聖めの働きは、さほど話したコラの反逆の後での出来事に出てきます。民数記 19 章にあります。コラと、その仲間が、生きたまま地獄に投げ込まれました。それを見たイスラエルの民は、「主の民を殺した」と言って、モーセとアロンにつぶやきました。そこで主は、イスラエル人が打たれて死ぬようにさせ、アロンの火皿による贖いによって、ようやく裁きが収まりました。そして主は、アロンの杖にアーモンドの実を結ばせることによって彼が祭司であることを、証しされました。このときに、主は、赤い雌牛を用意しなさい、と命じられました。これを宿営の外で焼いて、その灰を水にいれて、それを死体にふれた人々を清めるようにしなさい、と命じられました。イスラエル人が神に打たれてしんでいたため、聖められる必要があったのです。

14 まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。

「まして」という言葉は、聖書でよく出てくる言葉です、英語ですと“how much more”という言葉です。例えばパウロは、ローマ 5 章 10 節でこう論じています。「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。(ローマ 5:10)」私たちが将来、地上に降る神の怒りを恐れることはない、パウロが励ましています。自分は救われないのではないかと恐れている時には、パウロは、「ちょっと待てよ！あなたが罪人で敵対している時に、神はあなたに敵対したか？キリストの上にその敵意を置いたのではないか。神がキリストにあって和解してくださったのだ。ならば、なおさらのこと、もう和解したのだから、キリストの命によって神の怒りから救い出してくださいようにされる。」という意味です。

それと同じように、絶対に保証する、ということを強調するために、「まして」という言葉を使っていま

す。キリストは初めに、「傷のない」方でした。これは、いけにえに使われている言葉です。主にささげる牛や羊は、傷のないものでなければいけません。イエス様に欠けはありませんでした、十字架に付けられる時に、誰もがこの方に罪はないと証言しました。そして、「とこしえの御霊」による捧げ物でした。先ほどは、永遠の贖いとあり、今はとこしえの御霊とあり、15 節には、「永遠の資産の約束」とあります。主が一切のことを成し遂げてくださった、究極的に成し遂げてくださいました。御霊も永遠なる方で、永遠の効力をもってキリストの犠牲に関わっておられました。そして、ささげたものは「血」です。

この血による効果が、「良心をきよめる」ことがあります。そのために、「死んだ行ないから離れる」ことができ、「生ける神に仕える」ことができます。ここが極めて重要です。私たちが変わるための決めてになるものは何か？それは、良心です。良心が清められていないので、私たちはその罪悪感から、それを打ち消そうと自分の行いによって償おうとするのです。それを何とかして取り除こうと思って、ある人は他人にたくさん話をするし、ある人は作り笑いをするし、ある人は趣味に没頭するし、ある人は仕事で気を紛らそうとするかもしれません。そして、これが、いわゆるキリスト教的な活動によって消化しようとまでしてしまうのです。強迫観念に陥るのです。

しかし、その罪を、そのままキリストの十字架の前に、キリストが十字架で流された血の中に持っていく時に、その良心が完全に清められます。そうすれば、自分がこれまで止めようと思っていた悪い行いから離れることができます。そして、これまで神に仕えたいと思ってもできなかった葛藤から解放されて、喜んで主に仕える自由を持ちます。

15 こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けられるためなのです。

イエス様が死なれたことによって、初めの契約において約束を受け継ぐことができなかった人々が受け継ぐことができるようになりました。アブラハムに与えられた世界の相続は、旧約時代の聖徒たち、召された者たちは受け取ることができませんでした。律法に従えば、彼らは完全な形で義と認められえなかったからです。だから、すべての死者が陰府に降らなければいけません。けれども、キリストが死なれました。律法が要求している死刑をキリストが満たしてくださいました。そこで当初の約束である、アブラハムに与えられた世界の相続の約束が彼らも受け継ぐことができるようになったのです。

2A 聖所のきよめ 16-28

1B 血による契約 16-22

16 遺言には、遺言者の死亡証明が必要です。17 遺言は、人が死んだとき初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は、決して効力はありません。

著者は、ここから契約における血の効力を話していきます。私たち日本人の宗教では、水による「身の清め」であるとか、お祓いによる穢れの清めであるとかありますが、聖なる神と私たちとの関係はそのような表面的な関係ではありません。血が流される必要があります。

初めに、遺言の話をしていきます。この遺言という言葉と、15 節の「契約」という言葉は同じギリシヤ語「ディアセーケ」が使われています。契約という言葉そのものに、遺言、つまり死という意味が含まれています。誰かが死ななければいけません。アブラハムが、神と契約を結ぶときに、彼はいけにえの家畜を真っ二つに裂きました。その中を神が通られましたが、契約を破ればこのようになる、という意味でした。つまり、罪を犯せばその魂は死ななければいけない、ということです。遺言は、もちろん遺言者が死ななければその効力はありません。自分の父親に仮に1億円の資産があったとしても、彼が生きている間は相続することはできません。遺言に書かれていることは、遺言者の死によって有効になります。

18 したがって、初めの契約も血なしに成立したわけではありません。19 モーセは、律法に従ってすべての戒めを民全体に語って後、水と赤い色の羊の毛とヒソプとのほかに、子牛とやぎの血を取って、契約の書自体にも民の全体にも注ぎかけ、20「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である。」と言いました。

新しい契約において、そのしるしは血でありましたが、実は古い契約も血によって成立しました。先ほど話したように、モーセが神から契約のことは受け取ったとき、それをイスラエル人に話すときに、血を取って、それを契約の書、民全体に注ぎかけました。

21 また彼は、幕屋と礼拝のすべての器具にも同様に血を注ぎかけました。22 それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

モーセの律法には、油をもって聖別するという箇所があります(出エジプト 40:9)。けれども、血も注がれたことがここで分かります。それだけ、血によって初めてすべてのものがきよめられます。

ここが、人々につまずきを与える要因になっています。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」自分が行っていることはみな、罪ある性質から出ているので汚れています。行いによっても清められません。道徳律を会得しても清められません。宗教的儀式をもってしても清められません。自分は血を流すような罪を犯した、という真実に出会うことは、とても辛いことです。しかし、この真実を直視できる人は、真実の癒しと平安を得ることができます。自分が血を流すのではなく、身代わりに血を流してくれたのです。それで自分が罪責感や良心の呵責で苦しむ必要がもうなくなったのです。

2B 御自身のいけにえ 23-28

23 ですから、天にあるものにかたどったものは、これらのものによってきよめられる必要がありました。しかし天にあるもの自体は、これよりもさらにすぐれたいけにえで、きよめられなければなりません。

先に、良心のきよめの問題が語られていましたが、ここでは神の幕屋におけるきよめの問題が語られています。私たちには良心の咎めがあるために、神に近づくことができないという問題がありますが、実は神の側でも、罪人を受け入れられないという聖さからでるジレンマがあるのです。罪人をご自分のところに受け入れるには、それ相当のいけにえが必要です。天におられる神は、動物のいけにえよりもすぐれたいけにえでなければ、人を受け入れることはできません。

私は、天の御国がいかに聖いかを知るために、山上の垂訓を読むとそれを実感できます。私から出てくる自然の思いでは、なんとか自分の行いや振る舞いによって天に入れるのではないか、自分の行っていることは、まあまあいけているのではないか、と思うのですが、イエス様の言葉が一切を粉碎し、聖なる火でその偽善を焼き尽くしてしまわれます。兄弟を馬鹿と言えば、最後の審判で裁かれる、女を情欲をもって見れば、全身がゲヘナに投げ込まれる。比較的、自分に良くしてくれる隣人でさえ愛することが大変なのに、ましてや敵を愛せよという。そして極めつけは、「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」であります。

さらにイエス様は、聖霊が世に対して誤りを認めさせると言われた時に、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます、と言われました。「義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。(ヨハネ 16:10)」と主は言われます。天に昇られたイエス様を父なる神は受け入れられました。つまり、天はイエス様のような義を持っていないといけない、ということです。罪を何一つ犯さなかった人、行為だけでなく、心の思い図ることも含めて完全でなければ天に入ることはできません。

こんなことは無理だ、というのが私たちの反応です。神のところにはいけないという良心の呵責の問題もありますが、神ご自身も、「これでは誰も天に入ることはできない」という問題を抱えておられました。それが、ここで話している「天のきよめ」です。モーセが聖所の祭具を血で聖めたように、イエス様もご自身の血によって、天を聖められた、ということです。これで、天はキリストの血という唯一の理由によって、人を迎え入れることができるようになりました。

24 キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所にはいられたのではなく、天そのものにはいられたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現われてくださるのです。

ここからキリストが、天に昇られて行われたことが、十字架で流されたその血を文字通り父なる神に携えていかれたことが分かります。この血によって天がきよめられたのです。その勝利の情景を、

私たちは黙示録 5 章で眺めることができます。「また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っているのを見た。しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。巻き物を開くのに、見るのに、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激しく泣いていた。」だれも巻き物を開くことができません、つまり贖いが完全に行われていないのです。「すると、長老のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」さらに私は、御座・・そこには、四つの生き物がいる・・と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があつた。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取つた。(2-7 節)」小羊という言葉が何度も出てきます、つまり血を流されたキリストの姿です。他のものでは決してこの世界が贖われなかったのに、この方の流された血が世界を贖うのに有効であつた、ということです。

そして、「今、私たちのために神の御前に現われてくださるのです。」という言葉があります。地上の幕屋では、幕による仕切りがあり、大祭司も香の煙によって自分の身を聖なる神から隠さなければいけませんでしたが、しかし、キリストのいけにえによって、神の御座が私たちに大きく、広く、公開されるようになりました！

25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所にはいる大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることにはなさいません。26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

大祭司は年に一度、いけにえの血を携えて聖所に入りました。これを毎年繰り返していました。けれどもイエス様は、それを行なわれませんでした。イエス様は、何度も十字架につけられることはありませんでした。ただ一度だけ、十字架につけられたのです。しばしば、二千年前の出来事がどうして今の自分に有効なのか？という疑問を聞きます。その答えがここにあります。イエス様のいけにえは、永遠の効力をもっています。とこしえの御霊によってささげられた、その血は永遠の贖いをもたらすのです。今の時代に再び十字架につけられなければいけないような、一時的なものでもなく、無力なものでもないのです。

そしてここには、「世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかった」と書いてありますが、つまりキリストの十字架の後の世代の人々のみならず、その前に生きていた旧約時代の人々をも贖う力を持っている、ということです。

そして、再び「ただ一度」という言葉が出てきます。究極の、最終の解決です。そして、「今の世の終わりに」とありますが、手紙の始まりにも「この世の終わりの時には、御子によって、私たちに語られ

ました。(2 節)」とありました。世の終わりはその時から始まっています。私たちは、世の終わりというものを時間軸の中に置いてはいけません。もう二千年が経つではないかと思いますが、キリストが来られてからは、いつ何時、再び来られてもおかしくない切迫した時に生きているのだ、ということを知る必要があります。主がもう救いの御業を成し遂げられた、その究極の時代に置かれているということです。

そして、「罪を取り除くために、来られた」という言葉も大事です。これは 10 章で学びますが、旧約の時代の贖罪は、罪を覆うことをしましたが、罪を取り除くことはしませんでした。キリストが来られて、初めて罪が取り除かれました。

27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました。二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

ヘブル書の著者は今、「ただ一度」という言葉を人間にも当てはめています。私たちは、何度も死ぬことなく、一度だけ死にます。そして死後に神のさばきがあります。東洋人ならば、また他の人となって生まれ変わると思うかもしれませんが、そして日本人は、このただ一度の死という現実を直視しないように生きています。死んでもその霊が生きたまま、ここら辺を徘徊していると信じています。私たちが福音に触れるには、死という現実を直視しなければいけません。そして、その後に裁きがあります。生きている時に裁判所に行かなくても、地上でこの体で行ったことについて一切合切を、この天地を創造し、自分の人生を支配していた方の前で申し開きしなければいけないのです。このような裁きがあることを、聖書の知識を持っていない人でも知っている、パウロは論じています(ローマ 1:32)。

そしてこのことは、死後に救いの機会があると教える教義を粉砕します。死んで、死後に裁きが定められているのです。死んだら、その永遠の運命は定められているのです。

そして、私たち人間にある真実、キリストの贖いでも同じであると論じています。キリストの贖いも、繰り返されるものではなく、死が私たちに一度定められているように、一度だけで行われました。けれども、キリストは再び来るではないか、それはどういうことなのか？という質問をする人がいるかもしれませんが。その答えは、「罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られる」ということです。救いが足りなかったから二度目に来るのではなく、救われているから、その完成のために再び戻ってきてくださいます。

その「救い」とは、私たちの体の贖いであり、またこの滅ぼされる世界からの救いでもあります。キリストが、神が怒りを下される大患難の前に私たちのために、天から下ってこられて私たちを引き上げてくださいます。